海野十三先生没後 65 年◎江戸川乱歩先生生誕 120 年★特別記念大企画

永遠の十三　～海野十三と江戸川乱歩～

日時：2014 年 5 月 17 日（土）午後 2 時　　会場：北島町立図書館・創世ホール　2 階ハイビジョン・シアター
主催：海野十三の会　　講師：中　相作（なかしょうさく　江戸川乱歩研究家、名張人外境主宰者、名張市在住）

明治 27 年（1894）	10 月 21 日、江戸川乱歩、三重県名張町新町に生まれる。本名、平井太郎。生後まもなく父の転勤により転居。三歳から十八歳まで名古屋で過ごす。
明治 30 年（1897）	12 月 26 日、海野十三、徳島市徳島本町に生まれる。本名、佐野昌一。明治 39 年、父の転職により神戸へ転居。
明治 45 年（1912）	乱歩、早稲田大学予科に編入。のち、政治経済学部に進む。
大正 5 年（1916）	乱歩、早稲田大学を卒業し、大阪の貿易会社に就職。十三、早稲田大学予科に入学。のち、理工学部に進む。
大正 12 年（1923）	乱歩、「新青年」にデビュー作「二銭銅貨」を発表。十三、早稲田大学を卒業し、逓信省電気試験所に勤務。
大正 14 年（1925）	乱歩、初の小説集『心理試験』を出版。十三、技術専門書『米国製真空管一般特性表』を佐野昌一名義で初出版。
大正 15 年（1926）	乱歩、1 月に大阪から東京へ転居。「浅草趣味 *1」を発表。十三、「無線と実験」に科学童話「ラヂ夫と電子王の話」を発表。初めてフィクションが活字となる。
昭和 2 年（1927）	十三、「無線電話」に海野十三名義による初の科学小説「遺言状放送」を発表。
昭和 3 年（1928）	十三、「電気風呂の怪死事件」で「新青年」に初登場。
昭和 4 年（1929）	乱歩、「蜘蛛男」で「講談倶楽部」に初登場。
昭和 5 年（1930）	十三、海野十三名義による初の単行本『麻雀の遊び方』を出版。
昭和 6 年（1931）	9 月、満州事変が勃発し、十五年戦争の戦端が開かれる。
昭和 7 年（1932）	十三、初の小説集『電気風呂の怪死事件』を出版。
昭和 8 年（1933）	十三、「太平洋電撃戦隊」で「少年倶楽部」に初登場。
昭和 9 年（1934）	十三、「探偵小説管見 *2」。乱歩、「中央公論」に「柘榴」。
昭和 10 年（1935）	十三、「乱歩氏の懐し味 *3」、「本格探偵小説観 *4」。乱歩、「探偵小説壇の新なる情熱 *5」、「日本の探偵小説 *6」、「日本探偵小説の多様性について *7」。
昭和 11 年（1936）	乱歩、「怪人二十面相」で「少年倶楽部」に初登場。十三、「新青年」に「深夜の市長」、「深夜の東京散歩 *8」。
昭和 13 年（1938）	十三、「少年倶楽部」に「浮かぶ飛行島」、「キング」に「敵機大空襲」（『東京空爆』）。
昭和 14 年（1939）	十三、「少年倶楽部」に「太平洋魔城」、翌年にかけて「東日小学生新聞」などに「火星兵団」。
昭和 16 年（1941）	十三、1 月、世田谷の自宅庭に防空壕を築造。海軍省から徴用され、報道班員となる。乱歩、秋ごろ、初めて町会に出席し、防空群長を担当。のちに町会役員となる。12 月、日本海軍の真珠湾攻撃で太平洋戦争開戦。
昭和 17 年（1942）	十三、1 月、海軍報道班員として南方に赴き、デング熱に感染して 5 月に帰還。
昭和 19 年（1944）	十三、12 月に「空襲都日記」を起筆。翌年 5 月まで。
昭和 20 年（1945）	3 月 10 日、東京大空襲。乱歩、4 月に家族を福島県保原町の知人宅に疎開させ、単身池袋の家に残る。4 月 13 日、東京にふたたび大空襲。十三日記／ 4 月 14 日《○昨夜二十三時頃、わが横鎮は関東海面に警報を出したが、果して敵一機は房総に入り、つづいて敵大挙し、三月十日以来の帝都市街夜間爆撃となった》。乱歩自伝《十三日夜、B29 の大空襲あり、池袋地区焼野原となる。私の町会は南の半分が焼失し、隣組も全焼したが。私の家一軒だけ不思議に助かった》。十三、5 月に「降伏日記」を起筆。12 月まで。乱歩、6 月に家族の疎開先へ移る。
十三日記	8 月 10 日《○今朝の新聞に、去る八月六日広島市に投弾された新型爆弾に関する米大統領トルーマンの演説が出ている。それによると右の爆弾は「原子爆弾」だという事である。／あの破壊力と、あの熱線輻射とから推察して、私は多分それに近いものか、または原子爆弾の第一号であると思っていた》《戦争は終結だ》。12 日《○とにかく、遂にその日が来た。しかも突然やって来た。／どうするか、わが家族をどうするか、それが私の非常な重荷である。／○女房にその話（※みなで死ぬこと）をすこしばかりする。「いやあねえ」とくりかえしていたが、「敵兵が上陸するのなら、死んだ方がましだ」と決意を示した。／それならばそれもよ

海野十三と江戸川乱歩　関連随筆評論集

浅草趣味［＊1］

江戸川乱歩

さて野外いかものに関して、書き洩らせないのは深夜の浅草情景である。興行物のはねるのが大抵十時、それから十二時頃までは、まだ宵の口である。ゾロゾロと人通りが絶えない。やがて活動小屋の電飾が光を滅じ、池の鯉のはねる音がハッキリ聞える頃になると、馬道から吉原通いも人足もまばらになる。馬道辺では朦朧車夫が跳梁し出す。そして、公園のベンチに取り残されるのは、ほんとうの宿なし、一夜をそこで明かそうという連中ばかりである。警官の巡回がはげしくなる。角袖が何食わぬ顔で、うろんな奴の煙草の火を借りに来たりする。

「オイ、お前は宿があるのか」

「ヘイ、実は帰りはぐっちまいまして、電車はなくなる、仕方がないのでここで夜明しをさせて頂きます。どうか今夜の所はお見逃しを」

なんて問答が聞え出す。警官も世話がやき切れないと見えて、夜毎にベンチを宿とするもの十数人を数える。それが大抵は常習者だ。料理屋なんかの、ごみ溜をあさって、大きな竹の皮に一杯残飯を持って来る奴がある。てんでにアルミの弁当箱を持っていて、それを分けてつめる。明日の弁当になるのだ。残った分は皆して手摑みでムシャムシャやる。食いながら、深夜の浅草を、ピクニックにでも来たつもりで、世間話をしている。なかなか楽し相だ。

これらは別状ないのだが、そこへ時々異形のものが現れる。男のくせに白粉を塗っている。そして通行人に、

「チョイト、あなた」

なんて、くねくねと身体をよじらせて、手招ぎをする。野外かげまとも云うべき代物だ。公園の隅々には、云うまでもなく、淫売屋のポン引婆さんが、うさん臭い顔をして立っている。夜鷹というものには、不幸にしてまだ出会わないが、時に出ないとも限らぬ。

初出：新青年　大正15年9月号
底本：江戸川乱歩全集第24巻　平成17年

＊　＊　＊

探偵小説管見［＊2］

海野十三

思うにわが日本人ほど、種類の多い探偵小説を書く人種は外にいないのではあるまいか。日本人がそれを好むのは、一つはその天性によるものである。外国では専ら純本格の探偵小説が流行る。それ等の主体は皆トリックである。

外国の読者は科学常識が進んでいて、謎を解くことに誰もが相当の興味を感じるのである。だから純本格ものの多いのも道理である。

これに反してわが国の読者は文芸的には外国の読者階級よりも遥かに秀でているが、科学的では外国に於て見るが如きほど普及していない。此等の事情より考えてみても、わが国には純本格以外の探偵趣味的小説の歓迎されることが理解されるように私は思うのである。

そんなわけで、私はわが国の探偵小説に変格の多いことをそんなに慨いてはいない。むしろ変格の多いという事に探偵小説の将来性を認めている。

今日までに日本独特の変格探偵小説の評論も、その作品の分類論さえもまだ出ていないけれど、他日必ずそれが論ぜられる時期が来るだろう。其の時こそは探偵小説なる言語の意味が今日より以上にずッと明瞭になることと思う。

繰り返して云うが、探偵小説とは凡そ探偵趣味の入っている小説を指して云うのが至当で、純本格探偵小説だけに限るのは適当でないと私は考える。

そして其の意味に於ての探偵小説は、もっと勇敢に、新しい型を求め、此処ぞと思う方向にドンドン拡大してゆくのがよいと考えるものである。

初出：新青年　昭和9年10月号
底本：海野十三全集別巻1　平成3年

＊　＊　＊

乱歩氏の懐し味［＊3］

海野十三

誰しも江戸川乱歩といへば、氏の作品に現れてくるやうなグロテスクな人物を想像するだらう。ところが氏に会つてみると、凡そ氏がそれと反対に、如何にも慈悲深いお地蔵さまのやうな人物であるのに駭かされるであらう。或る酒席で若い妓がその席に乱歩先生が交つてゐられると聞き、先生はどこにいらつしやるのか教へてくれと私にせがんだ。私は、それより君が当ててみろといふと、彼女はそれなればと一座を見廻して、遂に指したのはその中の最もグロテスクなる人物だつた。私はその大変な誤りを指摘したが、後で本物の乱歩氏を知り当てた彼女は私に向つて、乱歩先生が、あんな優しい方とは鳥渡信じられないわネと感歎したのであつた。

しかし乱歩氏の優しさとか懐しさとかはその風貌に於て発見するよりも、更に著しく、氏の平常生活に於て見出すものである。氏は極めて正直であつて飾らない。そしてよく探偵小説のことを心配し、友人の身の上を案じそして新人に関心を持つことも比類なく、「あの人はどうなつたかなア」などと、途中で名前を消した同好の無名作家のことを想出して不図述懐されることが屢々である。人間乱歩の懐し味を感ずる者は、私だけではなからうと信ずる。

平凡社版の乱歩の全集の第十三巻の最後に「探偵趣